

あるがままに

甲 「先生、私はこうしてよく出て来て聞きますが、どうもはつきりしないのです。どうしても仏などないと心が言います。それならばやめよと言われたのでは困ります。何かしら私の心は求めているのです。だからこうして聞きもすれば書物にも手をふれます。それなのに私の心はすべてを裏切ります。それが聞けば聞くほど聞いてくれないのみか、ますます反逆的な私を見ます。私はとても救われないのじゃないかしらと思えます。」

乙 「なるほど」

甲 「ある方は私が悩むのを見て、それは仏が試練するのだと言われますが、仏は人を救うかわりに、苦しめるのですか。」

乙 「そんなところに試練などとはちよつとまずいですな。如来は救うだけです。試練などしませぬ。」

甲 「どうしてこうも悩まねばならぬのでしょうか。苦しまねばならぬのでしょうか。信じきれないのでしょうか。」

乙 「悩みぬきなさい。」

苦しみぬきなさい。

聞きぬきなさい。

自己に徹しきなさい。

人生を知りつくしなさい。

疑いぬきなさい。

こわしつくしなさい。

そこに何か生まれます。」

甲 「疑つてもいいのですか。」

乙 「いい悪いを言っているのではありません。疑う心は、後へは引かれず、前にも行けそうにない惑うた心です。やめられる疑いならばおやめなさい。だが真実の疑いならば、解決がつくまでは、やめられないでしょう。疑う心があるならば、もつともつと疑いなさい。」

乙 「それならば仏はないと言つてしまうこともできないのです。」

乙 「あなたは何を求めるのです。」

甲 「何かわからないのです。………しかし……… 私は救われたら、もつとおちついて人生が生きられると思えます。」

乙 「あなたは釈尊を信じますか。親鸞聖人を信じますか。」

甲 「それはもちろんです。」

乙 「それではこの方々の何を信じますか。」

甲 「釈尊の人格であり、聖人の生活です。」

乙 「それは面白い。釈尊の人格や、親鸞聖人の生活はいったい何によつて成立したのです。」

甲「……………」

乙「私どもは現実の生活者をぬきにしては何も考えることはできません。釈尊や聖人は何を生活されたのです。」

甲「それは……………」 如来です。」

乙「しかり！ 如来をぬきにしては、釈尊も聖人もありません。それははっきりわかりますね。」

甲「……………」ハイ。……………」ああそうでした。」

乙「それではあなたは、如来の实在について疑うことはできません。」

甲「そこです。そんなふうには聞くと私はとうの昔から如来の实在をば信じていたのです。けれども、聖人の信を、み教えを聞けば聞くだけ、ますます私は聖人と大きな隔りを感じるのです。ですからどうしても救われた気がしないのです。」

乙「わかりました。それではあなたは、救われるとは、聖人のような尊い心の相になることだと思つていられます。それは救いを求めているのではなくて、あなたは、善人になりたいのであり、賢くなりたいのです。」

甲「それはまたなぜです。」

乙「聖人はそのお師匠、法然上人の前に出て、あなたのように、外形や、相をまねようとなさつたでしょうか。聖人は師教を忠実に受け取つて、如来を仰がれたのです。師教によつて、ありのままの自己を見つめていかれたのです。『愚禿鈔』に仰せられました。」

『賢者の信を聞いて、愚禿が心を顕す。』

賢者の信は内は賢にして、外は愚なり。

愚禿が心は内は愚にして、外は賢なり。』

賢者とはもちろん、法然上人のことであります。ありのままに師教の鏡に写るわが心を見つめる時、生まれれば深まるだけ、愚禿の内心は愚であります。しかもこの救いきれぬ凡夫を救う本願は、いよいよ深く体感されてゆきました。見出される愚禿を聖者法然にまねずに、愚禿のままを救う本願の深さに徹していかれるところに、どうしても動かすことのできない悪人正機の救いがはつきりしてきました。愚禿は愚禿のまま、おちつかれ、満足される世界です。微塵も部分改造をしないで、全体のままに救われるのでした。」

甲「私は高上りしていました。」

乙「そうです。救われていない者はいつでも高慢なのです。われわれは、聖人が師匠の前に立たれたがごとく、聖人の信の前に立たねばなりません。」

甲「聖人は愚禿と言われても、私は口でこそ悪人ですと言え、心はちつとも言つてくれません。」

乙「それだからこそ、千枚張りの悪人です。」

甲「聖人は、善悪の二字総じてもて存知せずと言われたのに、私はついに善悪によつて人を裁かねば生きられぬ奴です。」

乙「そうです。かくて、われらは、聖人の懺悔を聞いて、われらの無慚無愧を恥じ、愚者と聞いて愚者と知らず、大悲を信じてよろこびもせず、たのしみもせず、高上り

ばかりしているわれを見ます。深くなればなるだけ、けつきよく聖人などにくらべられない、ほんとの悪人であり、愚者であります。けれども、如来は悪人正機と誓われました。聖人でも救われます。ましてわれらは必ず救われます。如来本願の深さが信じられれば信じられるだけ、私はいよいよ私の赤裸々を見つめます。」

甲「私は考え違いしていました。本願をぬきにして、賢者の相を装うていたのです。」  
乙「ハク車をかけた一時的な自分は、ほんとのわれではありません。ほんとの理想主義者は、あるがままの自己を見つめます。如来とあるがままのわれとが一体に救われてゆくところに、本願の大信があります。お念仏申しましょう。お念仏は廃悪修善の道具ではなくて、如来の名告りであるとともに、私どもの、如来に救われ帰命し報謝するところの、全人格の名告りであります。そこに如来が生き凡夫が生きます。」

甲「ありがとうございます。」